

〈歌・小説・日本語〉36

山上憶良あれこれ

勝又浩

憶良らは今は罷らむ子泣くらむ
そを負ふ母も我を待つらむ
言わずと知れた「山上憶良臣、宴を罷る歌一首」と詞書きのある「万葉集」

卷三に取められた一首である。今回は一転して短歌草創期の話になるが、まあお笑い下さい。実は最近、友人が山上憶良と漢籍との関連で新しい知見を研究発表して、私はいろいろ教わり、刺激も受けて、若いころ憶良短歌の解釈について漠然と懐いた疑問なども蘇ってきたというわけである。

ちなみに記しておく、憶良には「孤語」、つまり他に用例のない、彼しか使っていない語が多いのだそうで、そうしたところからも典拠になった漢籍の洗い出し、発見照合が今でも憶良研究の基本であるらしい。お役人としては

が、旅人主宰のそんな宴での作だったとすれば、まず、憶良の筑前の守赴任以後の作ということになるから、年齢も既に六七歳以後ということになる。とすれば当然、母に背負われるような乳飲み子は彼にはないだろうから、これは明らかに作り話、言い訳のための言い訳なのだ。いや、実は憶良には筑前赴任後にできた子供があったりして、そのことを普段から人々に揶揄われていたのかもしれない——というような皆が知る背景があって、それゆえこんな座興の歌が詠われ、人々も一緒に笑うことにできたのだろう等々。そんなふうな想像しながら、私は独りで面白がっていた。ところが、やはりそのころ読んだ参考書の一つに次のような一節があって、私は本当にびっくりしたのである。

「……この旅人への反発が憶良を憶良にするわけで、『宴を罷る歌』にしても、この宴のあるじであったであろう旅人の貴族的、享乐的な世界への反発からうたわれたものであるらしい。そ

「従五位下」という、昇殿の許される最下位の身分にとどまった人だが、四十代のころには「遣唐使小録」として渡唐もしている。当時の知識人のなかでも抜群の学識を持った人だけに違いない。そういうこともあって、千三百年余を経た今も彼が読んだであろう書物が探索され続けているわけだ。もちろん彼の残した歌自体の魅力があるからだが、生きた証がそんなところから測られるというのも面白いことだ。

ところで、私が興味を持ったのはむしろそんな難しい問題ではない。単に、冒頭に示した歌の読み、解釈についてのささやかな疑問にすぎない。これは憶良の「宴を罷る歌」として知られた一首だが、初めて読んだとき、私は憶良のユーモア精神を思い、また彼のこ

ういう文脈に置いてよんでみると、座興の諧謔のなかにいかにも憶良らしい抵抗のふくまれているのが見えてくる（西郷信綱『万葉私記』）
私が憶良のユーモアだと読んでいたところが、ここでは宴の主への「反発」「抵抗」だと言われている——えっ、そうなの。では、宴は爆笑どころか、一瞬にしてシーンとなった、ということになるのだろうか。

打ち明けて言ってしまうと、この意見を讀んだとき、私は即座にこんなことを言う学者を疑った。「憶良らは」の歌のどこを推せばそんな解釈ができるのか、この人はおかしくないか、と。仮りに宴会の主への「反発」「抵抗」の意味があったのだとして、それを当人の前で平気で言えたという事実は、それほど二人は親しかったという証にならないだろう。あるいは、親しくなどなくて本当に「反発」「抵抗」を含んでいたのなら、それに気づかぬ主・旅人はかなりお目でない男か、もしくは気づいても聞き流してやる大度量の男

念子

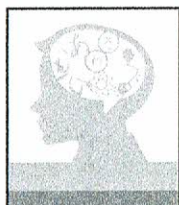
ういうユーモアを受け入れ、一緒に笑ったであろう「宴」の打ち解けた、遠慮のない雰囲気も想像できて、愉快な気持ちになったのだ。奈良時代も現代も、人の心はそう変わりはないのだ、と。そして、今ここに写しながら、「憶良らは」と「ら」の重なるところ、また「罷らむ」「泣くらむ」「待つらむ」と、少しずつニュアンスの違った「らむ」が畳みかけるように三回も繰り返されるところなども見事で、明るいリズムをつくっているから、そんなところも快さにつながったのだろうと、遅まきながら気が付いた。

この歌がいつ詠われたのか厳密なこととは特定できないらしいが、万葉集の卷三では、この歌に続けて大伴旅人の、これもよく知られた「酒を讀むる歌十首」が並んでいるので、旅人主宰の宴会でのことだろうと推測されている。当時の貴族たちの「宴」は原則的に夜を徹して行なわれるものだというから、身体の具合が何かの都合で途中で退席という人もあったに違いない。この歌

だということになるだろう。そして、そのどちらだったとしても、そういう男の掌のうえで皮肉のつもりの「諧謔」など弄している憶良という男は、これは逆にかにも小粒な人物に過ぎないことになるのではないかと。そしてこんな、子供にもわかるようなことが読めない学者とは一体何なのか。彼は要するに、労働者は資本家に「抵抗」していなければいけないのと同じように、身分の低い役人は貴族に、権威者に「反発」していなければいけない、そういう構図にしておきたかっただけなのではないのか、と。若かった私はそんなふうな単純に、一直線に、この古代学者を疑ったのだ。

しかし、後に分かったことだが、そこには無知な私の誤解もあった。旅人・憶良不仲説を言い始めたのは、正しくは高木市之助の『吉野の鮎』（昭和一六年）で、西郷信綱はそれを採用し、敷衍したのであって、憶良「反発」「抵抗」説は必ずしも彼の發明ではなかったのだ。

新説



〔歌・小説・日本語〕⑦
山上憶良あれこれ(二)
勝又浩

「旅人の同じく歌人としての大宰府生活が、憶良のそれとはおよそ対蹠的な性格をもち、したがって憶良はこれに接触することによっていよいよこれに反発し、反発することによっていよいよ自己の本質——独自の風格を押し進めていくことができた」(高木市之助「二つの生」『吉野の鮎』)

山上憶良が筑前守として在任したのは神龜三年(七二六)から天平三年(七三一)の五年間であった。年齢にして六七から七二歳である。一方、大伴旅人が大宰帥として赴任したのは憶良より二年後の神龜五年。そして憶良より一年早い天平二年に帰任している。年齢は憶良より五歳若かった。

こんな事実だけをとると、憶良はまるで旅人の尖兵だったように見える。

助は言う。「和するというよりむしろ反抗しているに近い。この場合憶良の態度は「卿も御不幸にお逢いですか、私も同様です。しかし見てください貴方とちがう私のこの歌を」とでも言いたそうである」と。先の「宴を罷る歌」の読み方には驚いたが、この「日本挽歌」の解釈にも私は全く理解の外と言うしかない。

高木市之助は先の「世の中は……かなしかりけり」を例に旅人の歌が「自己中心的」だといひ、それに対して憶良の歌は「妹を中心」にしていると言う。しかし高木説が「妹を中心」にしているという憶良の「妹が見し棟の花」にしても、その落ち着く先は結局「わが泣く涙」なのであって、その限りでは旅人の「かなしかりけれ」と変わりはないのだ。ただ、「日本挽歌」は旅人になり代わって彼の思い、悲しみを憶良が歌っているのであって、問題とするならむしろこの代作歌という形式であるだろう。高木説は憶良の「反発」を強調するあまり、旅人になり代わっ

本隊を迎えるために二年も前から現地入りして準備を整え、いよいよ大將をお迎えして、さてお殿様が無事に任を終えて帰還するのを見送ってから、その後始末を済ませて自分も一年遅れの帰郷を果たす、というような図である。と言ってもむろん、憶良は旅人の命令でそうしたわけではない。組織の一員として必然的にそうした役割りになったのだが、なまじそんな「接触」があったために、憶良の方には、都にいれば知らずに済んだかもしれない役人としての運不運のようなもの、あるいは身分家柄の違いを強く意識することになったかもしれない。

この「二つの生」には旅人の「報凶問歌」と憶良の「日本挽歌」の「対照」を指摘したところもある。旅人は大宰で悲しみを歌ってみせている憶良という面を忘れてしまったらしい。反抗反発しながら、当のその人の悲しみを歌うとはどういうことなのか、まことに分かりにくい心理ではないか。

高木市之助が、憶良の旅人への反発を示す例としてもう一つ上げているのが「梅花の宴」の歌である。これは、その序文が今度の年号「令和」の典拠となったことですっかり有名になったが、「天平二年正月十二日」、大宰府旅人邸で催された観梅の宴で披露された三十二人の歌を取録したもの。旅人には歌についての格別な見識があつて、そこから生まれた歌集でもあつたようだ。書で知られた王羲之の「蘭亭序」を模したとされる漢文の序と、それを要約したような七言絶句の漢詩を持った珍しい歌会記録である。序文は憶良の筆だとされた時期もあつたようだが、今は旅人の作として疑われていない。「主人」旅人の歌は、
わが園に梅の花散るひさかたの天
より雪の流れ来るかも

府着任直後、ともなった妻大伴郎女を亡くしているが、それに対してたくさんの弔問があつたのだろう。その一つに返礼したのが次の一首である。

世の中は空しきものと知る時し
 いよますますかなしかりけり

よく知られた一首であるが、悲しみのために生きる力が湧かない、そんな気持ち純朴によく表れていると思う。こうした旅人を、傍らにいた憶良は当然知っていたわけで、彼も歌をもって上官を見舞ったが、それが「日本挽歌」と言われる一組、長い漢文の序と漢詩、さらに長歌と反歌五首である。全体に熱のこもった力編である。ここに全文は引けないので一首をあげれば、

妹が見し棟の花は散りぬべしわが
 泣く涙いまだ干なくに

がある。棟は梅檀で九州に多く、五月ごろ薄紫色の房状の花をつける。歌われた女性の上品な姿も浮かんで、美しい一首である。

ところで、これら旅人にさざげられた「日本挽歌」全体について高木市之

いかにも雅びた趣きである。そして客人たちも大方はそんな雰囲気に合わせて園や梅や春を寿ぐ歌を寄せているが、そんななかで憶良ばかりは、

春さればまづ咲く宿の梅の花独り
 見つつや春日暮さむ

であつた。これは、高木説みによれば、まず「宿」が旅人邸ではなく憶良家になるし、「独り見つつや」の「や」は反語ではなく疑問、従つて歌意は「自分は今たつたひとりでの静かな春の日を暮らすことであろう」、つまり、こんな騒がしい宴会に呼ばれたのは迷惑だと言わんばかりの「反発的な歌を投げつけたのだ」ということになる。高木説はここでも、あの「宴を罷る歌」と同じ読み方を通してしているわけだ。

この「梅花の宴」の歌の「序」文には「初春の令月にして、気淑く風和ぎ」の一節があつて、そこから年号「令和」の語が採られたわけだが、その宴の裏側には、高木説によれば、こんな人間的なバトルも隠されていたことになるが、さてどうだろうか。

(1955年)



〈歌・小説・日本語〉 38
山上憶良あれこれ (三)
勝又浩

憶良の歌に旅人への反発や抵抗を讀む高木市之助説は、一つの歌がいかに多様な解釈を可能にするかという側面の極端な例であるだろう。それで少し立入って紹介したが、今から見ると、こういう説が生まれ、それが受け入れられたという事実、歴史自体が次の研究対象かもしれない。

高木市之助は晩年、八四歳になってからも『大伴旅人・山上憶良』(昭和四七年)を刊行しているが、そこでは二人の反発関係は専ら「文学論的な意味」なのだと言明補正している。その後の万葉研究や自説への批判を意識したわけだ。しかし、そんな議論のなかにも「人間の無限の発達を確信する社会主義は」などということばが唐突に表れたりして、彼が生涯、いわば心情左翼

であったことが自ずから滲みでている。憶良の抵抗反発説は、実は高木自身の昭和十年代という時代への抵抗反発と重なっていたのだ。「万葉集」を背囊に入れて出征していったという昭和のたくさんの兵隊たちへの、それが彼のメッセージでもあったのだろう。

では、その昭和も既に昔話となった平成令和の時代、このあたりはどんなふうにならわれているのだろうか。たとえば最近読んだ稲岡耕二『山上憶良』(平成二二年、吉川弘文館)にはこんなふうにかかれてある。「数十年前には、こういう歌(註「宴を罷る歌」)を根拠として憶良と旅人との不仲を言い立てる人もあったが、全く見当外れである」と。そうして、私が学生の頃想像したように「宴を罷る歌」は一席のユーモ

アだったという説を紹介したあと更に、憶良が、あの「子等を思ふ歌」の作者であったことを思い出せ、と付け加えている。そのことは「大宰府の多くの官人たちの間に知られており」その事実の上に立つての即興歌だったのだと。七〇歳だった憶良に乳飲み子がいたかどうか、そんな問題でもなかったのだ。これで私の長年のわだかまりもひとまず晴れたと言っておくのである。

ちなみに記しておく、この稲岡耕二は万葉学のなかでもとくに万葉仮名を中心に研究する人で、私も今度の俄か勉強でいろいろ教わることが多かった。たとえば先の「梅花の宴」での憶良の歌「春さればまづ咲く宿の梅の花独り見つや春日暮さむ」でも憶良は「宿」の字に一般的な「屋戸」や「夜渡」とは違う「耶登」の字を当てていて、これは明らかに旅人邸への敬意を表した用字だったというのである。万葉学は今こんなところまで進んでいるわけだ。こうして稲岡説は旅人、憶良の親しさ、二人の連携ぶりを解き明か

しているが、それらに教わりながら私の想像はさらに膨らんだ。

万葉歌人である大伴旅人は、一方で日本最初の漢詩集である『懷風藻』にも一編が採られているような漢詩人でもあった。漢詩は当時の貴族、宮廷男子たちの一般的な学問であり、教養であったのだが、そうしたなかで旅人は、まだ表記法の確立されていなかった日本の民族詩、長歌短歌を、もつと格上げして、漢詩集に並ぶような大和歌集をつくりたいと考えていたらしい。そして、そういう試みの一つが「梅花の宴」であったのだろう。今は「万葉集」の一部になってしまつて元の形が見えにくくなっているが、当初は参加者三二人の歌を収録した、一冊の独立した冊子として作られたのだ。

それは前述のように、「蘭亭序」に倣つた漢文の序に始まつて、それを要約しようとした漢詩七言絶句が続き、最後に三二人の和歌が並べられている。こういう歌会記録としての「梅花の宴」である。ここまでは、実は「万葉集」を丹念

はむい。

に見て行けば誰にも分かることだが、そのうえにもう一つ、収録された歌が全て「音仮名表記」によつていゝところが、当時としては画期的な試みだったのだと、稲岡耕二は指摘している。万葉仮名には戯調のような遊びもあるが、基本的には「吾者妹思、別來札書」のように訓詁を主体にしたものと、「字米能波奈知流」式に一字一音主義を通したものと二種あるが、この音仮名表記を始めたのが他ならぬ大宰府時代の旅人であり、その最も強力な同調者、協力者が憶良だったと、稲岡耕二は言うのである。旅人には歌についての格別な見識があったと、前回私が書いたのは、こういう事情だった。

もう一例。旅人には「松浦河に遊ぶ序」なる、漢文と和歌からなる一編がある。これは中国唐代の伝記小説、桃源郷に迷い込んだ男の話である『遊仙窟』を模して、仙女たちとの問答部分を一首一首の歌のやり取りで描いた、いわば歌物語の元祖である。『遊仙窟』は奈良時代にもたらされて知識人たちに

人気があつたそうだが、旅人には人々周知のその物語にのせて新しい日本の民族文学Ⅱ歌物語を作ろうという、「梅花の宴」と同じ意図があつたのだと、私は想像する。歌会記録の次は歌物語だったのだ。

最近「松浦河に遊ぶ序」全体が旅人とその周辺の官人たちとの共同制作だったとする見方になつていゝそうだが、これに関わる憶良の旅人宛書簡とそれに付した三首の歌が残つていゝ。詳しく紹介するスペースがなくなつたが、旅人の夢幻的な歌物語に対して、憶良は物語の舞台になつた「松浦県」の歴史的現実的な事跡を歌い、しかも、近いのには自分はまだその地に行つたことがない、などと歌つていゝ。前述の高木説ではこそとばかり憶良の旅人批判の資料にされているが、今は書簡も含めて一つの作品だと理解する読みが主流になつて大分様相が変わつてきたといゝ。つまり、これはこれで旅人の歌物語に和した、もう一つの「松浦」歌物語だったといゝわけである。

全体が 冒頭に置かれた



歌・小説・日本語 ③
山上憶良あれこれ (四)
勝又浩

山上憶良で最も親しまれているのは「子らを思ふ歌」であろう。とくにその反歌、

銀も金も玉も何せむに勝れる
宝子に及かめやも

は、ことばも心も分かりやすいから人気としては一番かもしれない。しかし、百人一首よりもいろは歌留多むきの感で、私にはあまりよい歌とは思えない。憶良を代表するのはやはり「貧窮問答歌」だろう。何よりもその迫力に圧倒される。

全体は二段に分かれ、まず貧士が自分の貧しい生活ぶりを述べて、「問答」というとおり最後に君の方はどうかと問いかける。後半はそれに答えて農民らしい窮者がやはり貧しい生活の現状を述べるという形だ。「風雑り雨降る夜

か親しい人にも近況近作をと乞われて、それに応えたのかもしれない。それで彼本来の情念が噴出することになったのだろう。というのは、前半の貧士のことばに、「我を措きて人は在らじと誇ろへど」などという一句もあつて、いかにも憶良らしい矜持が見えるからだ。この情景全体が彼の地方官在任時代の見聞であり、体験であり、彼自身の思いだったのである。

この「貧窮問答歌」よりさらに二年後、憶良最後の年だろうと推測される七四歳のときの作品に「沈痾自哀歌」なる悲痛な一編がある。憶良は閑節リウマチだったろうとされる持病のために晩年の一〇余年を歩行も困難なほど苦しんだらしいが、そういうわが身を嘆いた一二〇〇字を越える漢文と長歌一首短歌六首からなる作品である。とくにその冒頭、自分は「胎生より今日に至るまで」、「修善」を志し、「作悪」の心無く、三宝を敬い、「百神を敬重」して生きてきたのに、「嗟呼：我何の罪を犯してか、この重き疾に遭へる」と、

の雨雑り雪降る夜は術もなく寒くしあれば」と畳みかけて行く前半、続いて「天地は広しといへど吾が為は狭くやなりぬる日月は明しといへど吾が為は照りや給はぬ」と、わが身の不運不幸を嘆くところから始まる後半、そして、「直土に薬解き敷きて父母は枕の方に妻子どもは足の方に囲み居て憂へ吟ひ」と、縄文時代かと思わせるような生活の具体的な描写があり、そこへさらに「楚」(管)まで持った役人が現れて、「楚取る里長が声は寝屋戸まで来立ち呼ばひぬかくばかり術無きものか世間の道」と結ばれる。

憶良自身のことを歌っているわけではなく分かつていながらも強い迫力に圧倒される。こうしたことばの力はやはり柿本人麻呂や山部赤人らと同様、

自らの不運不幸を嘆いている。今ここには立ち入らないが、こんな苦しみのなかにあるとき見舞ってくれた人に応えて歌ったのが次の一首。

土やも空しくあるべき万代に語り続くべき名は立てずして

これが憶良の辞世の歌ともなった。憶良の、あらましこんな生涯を知って、私が反射的に連想したのは中島敦の小説「山月記」の主人公李徴のことだった。知る人も多いと思うが、「山月記」はこんなふうが始まっている。

「隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった」

ずば抜けた秀才で、それだけに自尊の念も人一倍強く、周囲と馴染まずに孤立するばかりであった。ためにある日、とうとう発狂して虎となつてしまったという男の話である。この李徴には詩人となつて天下に名を馳せたという野望があつたのだが、さて、

万葉歌人ただけが持った、平安歌人たちにはもう無くなつたものだ。

ちなみに記しておく、憶良は彼の歌にしか見られない「孤語」の多い人だと前に言ったが、「貧窮問答歌」にはそれが集中していて、一首中に二十七語もあるのだという。それは「堅塩」「粕湯酒」「楚」「寒」のようではなく、「貧」「飢」「寒」のような状態を表す語も含んでいる。大方は漢語由来であるから、そんなところもあつて、斎藤茂吉などはあまり評価しなかつたわけだ。だいたい「貧窮問答」などというテーマ自体が和歌全体のなかでも突出している。万葉歌人のなかで憶良はただ一人プロレタリア文学を実践していたわけだ。

それで、もう一つ余計な情報を記しておく、この「貧窮問答歌」は彼の晩年に近い七二歳の作だと推定されている事実だ。伯耆守や筑前守として地方にいたときではなく、それを終えて都に返つてからの作だというわけだ。末尾には「山上憶良頓首謹上」とあつて、誰

憶良はどうだったろうか。

名門でもなかつたのに若くして遣唐使団の一員に抜擢されるほどの秀才だった憶良だが、それだけに官吏としての自分出世昇進に関しては生涯不満だったのではないだろうか。いきおい相当に狷介、かなりつむじ曲がりな存在だったろうとは、彼の歌のあちこちに見えている。彼が、実際には地方長官まで勤めながら生涯貧士意識を持ち続けたのは、それは経済的な意味ではなく、階級的社会的な意味であつたろう。

そうしたなかで大宰府時代、大伴旅人との出会いがあつたわけだ。それは彼の唯一輝いた時代、幸せな時代だったのではないだろうか。旅人との出会いがあつてこそ彼の才能も開花し、万葉歌人を代表する一人となつたのだから。それは、「山月記」の李徴が親友袁愔がいて、結果的に詩を残し名を残せた事情ともよく似ている。さらに李徴の生きた天宝年間とは八世紀半ば玄宗皇帝の時代だが、それが憶良の生きた時代とも重なっているのも面白い。



〈歌・小説・日本語〉④〇

山上憶良あれこれ(五)

勝又浩

天飛ぶや鳥にもがもや都まで送り
申して飛び帰るもの

人もねのうらぶれ居るに籠田山
御馬近づかば忘れしなむか

天さかる鄙に五年住ひつつ都の
風習忘れえにけり

吾が主の御霊賜ひて春さらば奈良
の都に召上げ給はね

これらは、大伴旅人が大宰府の任を終えて都に帰るについて、憶良が献上した歌である。全体は、旅人邸での送別の宴で披露された四首と、それに追加して後に作られ届けられた三首と、合わせて七首ある。ここにはそれぞれから二首ずつ採ったが、全体に惜別と、しかしこの別離にはお目出度い要素もあるわけだから、そういう祝意も含めて巧みに歌い込んでいる。

に終わったことになる。ともに憶良の格別な思いの籠った歌たちだと分かるが、それが二人の人間的な関係を代表しているのではないだろうか。前回言った、憶良の人生で一番輝いていた、幸せな時代である。西暦にすると七二八年から七三一年の間、約三年間であった。

そう書いて、私が今考えているのは、憶良による、この「日本挽歌」という命名の事実である。「挽歌」という語は、「相聞」などととも「万葉集」の部立ての名称にもなっていて、日本語としてすっかり定着しているが、言うまでもなく元来は漢語である。葬送の柩車を引く者によって唄われた歌が語源だとされているが、転じて哀悼哀傷のための詩を言うようになったわけだ。ただ、ここで注意すべきは、今の挽歌は日本語だが、旅人憶良の時代の挽歌はまだ中国語だったという事実だ。これらのことは、万葉学者たちにはあまりにも当たり前すぎることなのだろうか、誰も書いていないが、旅人夫人の死を

ただ、そのなかで私の気になるのは、ここにあげた四首め、「吾が主の——」一首である。大意は「あなたさまの力によって、春になったら奈良の都に召し上げてくださいます」ということになるが、さて、この一首の存在をどう理解すべきか、という問題である。初めに紹介した、旅人にことごとく「反抗」した憶良というイメージにはいかにも合わないからだ。ちなみに、旅人・憶良対立説を称えた高木市之助の最初のエッセイ「二つの生」はこの歌については全く触れていない。戦後、二人の対立はあくまでも「芸術論的な意味」だと言うようになってからは、この歌をさして、「誰かの前に三拜九拜しているものほしそうな奴隷の顔ではない」とまで言っている。一度、抵

悼んだ歌に、憶良がことさら「日本挽歌」と名付けた理由なのだ。言い換えると、まだ「万葉集」が生まれる以前、挽歌がまだ漢詩のことでしかなかった時代のなかで、それを大和歌で詠じて献上したことが、憶良の旅人への最大の表敬であり、親愛でもあったわけだ。

旅人が、日本の宮廷では漢詩が中心で、それに比べればまだローカルな存在に過ぎなかった大和歌を漢詩並みの文化に格上げしようと、万葉仮名の新しい表記法を工夫実践したり、「遊仙窟」を大和歌で模した、日本最初の歌物語である「松浦河に遊ぶ序」を作ったりするような人物であったことは前にも言った。そういう旅人の傍らにいて最も頼りになる知識人の一人が憶良に他ならなかった、とも。そうした旅人の期待にみごとに応えているのが「日本挽歌」なのだ。旅人と憶良は、身分のうえでは動かしようのない違いがあったが、こと文学、大和歌に関しては、高木説に反して、お互いに認め合った「二つの生」だったのではないだろうか。

抗反発の旗を挙げてしまうと、それに反するものは一転して「奴隷」になってしまうようだ。

高木説を継承した西郷信綱はこれを、「かなり痛々しい」「うちしおれた老地方官」の姿だとして、それが官僚としての現実だったろうと言っている。しかし、憶良について蛇足すると、この歌を捧げた翌年、憶良は念願かなって筑前守を解かれ都に帰っている。それが「吾が主」の力に依ったのかどうかは分からないが。

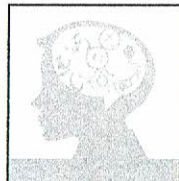
話が飛ぶが、憶良には「日本挽歌」の力作がある。前にも触れたが、それは大宰府着任直後に妻大伴郎女を亡くした旅人に捧げられた、漢文の長い序と長歌一首、反歌五首からなる、力のもつた哀悼詩である。この献上歌の末尾には「神亀五年七月二十一日 筑前国守山上憶良上る」と銘記されていた。憶良と旅人の歌のうえででの交流は、この「日本挽歌」から始まって、先の「天平二年十二月六日 山上憶良謹みて上る」と銘記された惜別七首

か。憶良の「日本挽歌」と、惜別の歌七首こそは、その良き証しなのだ。

この稿の初めに私は、

憶良らは今は罷らむ子泣くらむ
そを負う母も吾を待つらむ

の一首が、憶良のユーモアなのか、それとも気に入らない宴会への抵抗反発なのか、という問題を掲げた。もちろん酒宴の主への批判などではあり得ないことは明らかだが、しかも、ここまで辿つてくると、それはユーモアだったというのあまり適切だとも思えなくなってきた。旅人のユーモア精神は「酒を讃むる歌」一つ見ても明らかだが、「貧窮問答歌」が代表する憶良にはそんな気配はまるでないからだ。彼は、どちらかというところの喜びよりも不幸不運に強く反応する質の人であったようだ。しかし今は、こんなふうには言えるだろう——この歌「憶良らは」には、自分の発言は皆が待っている、聞いている、という自信が溢れている、と。それが旅人在任時代の憶良の日々だったのである。



〈歌・小説・日本語〉 ④
作者と主人公

勝又浩

友人に奨められて渡部泰明「和歌とは何か」(平成二年、岩波新書)を読んだ。短歌について体系的な勉強をしたことのない私には教わるころも多かったし、そこから発して自分の領域とも通ずる問題もあってさまざまな刺激も受けた。もう一〇年も前の本だから何をいまさらという人もあるだろうが、例によって門外漢の感想を少し書いておきたい。たとえばこんな問題もあった。

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへ
 ば忍ぶることの弱りもぞする

百人一首に入っているから知る人も多いであろう、式子内親王の代表的な一首である。

である以上は生活そのものではなく、そういう自分を演じているのだ、ということになる。

さらに、この歌は、作者が男になって詠った虚構の歌であることは、当時の人たちには何の疑いもないことだったとする最近の研究も紹介している。理由はいたって簡単で、「忍恋」とは、その次には「求愛」に進む段階の恋のこと、その「求愛」はもっぱら男のすることだと決まっていたからだ、というのである。平安時代は、女性から男性への求愛行動ということはなかった。求愛はもっぱら男の役割りだった。後代はそれが忘れられてしまっただけで、女性も忍ぶ恋をする。歌うと理解してしまっただけである。かくして式子内親王も忍ぶ恋の濡れ衣を着せられてしまったわけだ。しかし、男の歌だとすると「忍ぶることの弱りもぞする」とはずいぶん頼りない男だと見えるが、それも武士道以前、「葉隠」以前、お公家さまたちの話だということになるのだろうか。

式子内親王は後白河院の第三皇女で、齋院として加茂神社に一年間仕えたが、退下した後も独身を通した人だ。後白河院の血をひいて、と言うべきか早くから歌人としても知られて、藤原俊成と並び称されたという。この一首は、もと「忍恋」の題もとに「百首歌」として詠まれたものだが、俊成によって『新古今集』に採られて広く知られるようになった。内に秘めた情念の迫力のようなものが伝わってくる優れた一首だと思う。この本には、「命の糸よ。途切れるなら途切れよ。もし生き延びてもしたら、弱りはててこの恋を秘密にしていられないかもしれぬ」と現代語訳が付されている。

一人称文学である歌は、伝統的にこういう問題を含んでいる。短歌は基本的に一人称、つまり「私」が「——」した。見た・思った」の形式で詠われるが、その「私」が、これも基本的に省略されるからだ。その結果、詠われた事柄は、これもまた基本的に、歌の外にいるはずの作者に重ねられてしまふ。この「玉の緒よ」もそういう文法のおかげで読まれて、忍ぶ恋の主を作者式子内親王だとして疑うこともない。それで、能「定家」のような想像も生まれることになるわけだ。しかし厳密に言えば、つまり一首の表現された範囲で言えば、作者式子内親王が「忍恋」をしていたかどうかは分からない、決められないわけだ。

そのところをこの著者は「現実の作者」と「作品中の作者」ということばで説明していて、私は、うんと思っただけで、言うまでもなくこれは小説がいつも抱えている問題でもあるからだ。時代小説やSF小説、あるいは読み物小説などは別として、いわゆる純文学、とく

ろ、この一首を中心にした古い能「定家」(金春禅竹)がある。ここでは、この忍ぶ恋の相手が、俊成の息子定家になっているのだから面白い。ただし恋の執着は男の方がつよくて、死んだ後も薦葛となって式子内親王の墓石に絡みついていくという話である。この本でもその能に触れているが、いわば歌の誤読の例として、ということになる。

「玉の緒よ」の作者は確かに式子内親王だが、だからといって、彼女が「忍恋」をしていたというわけではない。歌は課された「題」に従って忍ぶ恋を詠った、言い換えれば忍ぶ恋をする人を演じてみせたのであって、実際に恋をしたかどうかは別の問題だということである。

ちなみに、この「演じた」というところ、「式子内親王は、恋してはならぬ女性に恋をしてしまった男、という役どころを演じて詠んだのである」というところが本書の新鮮な切り口の一つである。この歌に限らず、どんな平凡な日常を詠った歌も、それが短歌詩人に私小説と言われるジャンルではこれがとてもややこしくなる。自分のことを嘘偽りなく書くのが純文学だと信じ、公言している作家もいれば、明らかに自伝的な小説だと見えるのに、私小説ではないと言ふ作家もいるからだ。批評家や研究者は慣れているから「現実の作者」と「作品中の作者」、つまり作家と主人公とを、礼儀としても区別して考えるが、一般読者にはそんな礼儀など通じない。お構いなしに作中の「私」を現実の作者と重ねて読んでしまひ、周辺を巻き込んでときにモデル問題やプライバシーの問題まで生ずることになるわけだ。能「定家」などは、現代なら裁判沙汰にもなりかねない作品だということになる。

歌も小説も、これらはすべて、日本語が主語なしで成立する文法を持つことから生まれた問題、言い換えると、「現実の作者」と「作品中の作者」、主人公と語り手を一体化してしまう日本語の表現構造から生まれてくる問題なのだ。